# 講座

# メッシュフリー/粒子法 第3回 Smoothed Particle Hydrodynamics 法による シミュレーション

萩 原 世 也\*・野 口 裕 久\*\*

**ABSTRACT** The series of articles summarize the current progress of meshfree/particle method. In this issue, as one of the well-known and widely-used particle methods, the smoothed particle hydrodynamics (SPH) method is introduced. The theoretical formulation is outlined first and then some numerical examples including a shock wave analysis of compressible flow and a dynamic failure analysis of solid are illustrated.

#### 1. はじめに

第3回は粒子法の一つである SPH (Smoothed Particle Hydrodynamics)法について解析方法の解説と解析例の 紹介を行う.

SPH法は一般的には粒子法と呼ばれ, 1970年代に天体のシミュレーション計算に用いられた手法を起源としている<sup>1,2)</sup>. SPH法では,連続体を近似的に多数の粒子集合で表現し,その粒子挙動を個々の粒子の運動方程式を解くことで求める. Lagrange 解法であるため, 流体解析においては,取り扱いが困難とされる対流項を含まずに解析できる利点があり,固体解析において は,粒子の相対的な挙動により変形を表すことができるため,破壊を含む大変形問題に適している.また 個々の運動方程式を陽的に解くことで,より簡便に大規模シミュレーションに適用することができる。

SPH法は,開発当初は圧縮性流体のシミュレーションに用いられ,その後,非圧縮性流体に適用された<sup>31</sup>. 近年は酒井ら<sup>4)</sup>が非圧縮粘性流体への適用を行っている.また,構造解析への適用<sup>5)</sup>は近年になって行われ, 固体の超高速衝突解析<sup>5)</sup>や爆破解析<sup>6)</sup>に適用された.最近,宇宙開発が進むとともに,宇宙空間での宇宙ステーション等に,スペースデブリが衝突する際<sup>71</sup>やそ

Meshfree/Particle Methods — Series 3: Smoothed Particle Hydrodynamics Method. By *Seiya Hagihara* (Dept. of Mechanical Engineering, Saga University) and *Hirohisa Noguchi* (Dept. of System Design Engineering, Keio University).

\* 佐賀大学理工学部機械システム工学科

のシールドの性能評価の解析<sup>8)</sup>などに積極的に用いら れ,既存の有限要素法解析では取り扱いが難しかった 解析に適用されている.さらに,弾塑性解析などにも 適用できるように研究が進められ<sup>9)</sup>,バイオメカニク スへの適用も研究が進められている<sup>10,11)</sup>.なお,SPH 法の基礎定式化,応用例については,近年出版された 文献<sup>12)</sup>に詳しい.

本稿では、第1,2回と同様、固体/構造解析を中心 としてSPH法の解説を行う.すでに述べたように、SPH 法により、有限要素法や差分法で取り扱うことが難し かった非連続体的な固体の破壊現象や接触解析を容易 に実施することができる.また、有限要素法のように 要素のコネクティビティすなわちメッシュを必要とせ ず解析を行うことができる.更には、第1回チュート リアルで示したメッシュフリー法に特有なバックグラ ウンドセルと呼ばれる積分領域もない、いわゆる本当 のメッシュフリーの解析手法である.以下では、まず SPH法の基礎定式化について述べ、その後で具体的な 解析例を示す.なお、圧縮性流体解析については、固 体解析との基礎方程式の違いも含めて解析例において 示す.

#### 2. SPH法の概要<sup>5,6,12)</sup>

- 69 ---

SPH 法は、連続体を一群の粒子の集合とみなす.こ のとき粒子間の影響力を考慮し、粒子単位で任意の時 間における偏微分方程式を解くことにより、質量(密 度),速度,エネルギなどの物理量を評価する.一般に、 位置ベクトル x における関数値f(x)は

<sup>\*\*</sup> 慶應義塾大学理工学部システムデザイン工学科

$$f(\mathbf{x}) = \int_{\mathbf{x}' \in V} f(\mathbf{x}') \,\delta(\mathbf{x} - \mathbf{x}') \,dV \tag{1}$$

と書ける. ここで V は連続体の占める領域(体積),  $\delta(\mathbf{x}-\mathbf{x}')$ はDirac delta functionであり,以下のような値 をとる.

$$\delta(\mathbf{x} - \mathbf{x}') = \begin{cases} 1 & \mathbf{x} = \mathbf{x}' \\ 0 & \mathbf{x} \neq \mathbf{x}' \end{cases}$$
(2)

粒子法では、他の粒子からの影響を考慮するために、 ある位置 x での物理量 f(x)を表す際に、 $\delta(x-x')$ を kernel function とも呼ばれる平滑化関数(重み関数) W(|x-x'|, h)によって置き換える.これにより他の粒 子による影響も考慮された平滑化された物理量を式(3) のように求めることができる.ここで、hは粒子間の 代表的距離であり、x, x'はそれぞれ評価中心、任意粒 子の座標値である.

$$\langle f(\mathbf{x}) \rangle = \int_{\mathbf{x}' \in \mathcal{V}} f(\mathbf{x}') W(|\mathbf{x} - \mathbf{x}'|, h) dV$$
(3)

また,平滑化関数は一種の確率密度関数であり,更に は $f(\mathbf{x})$ が一定値の際には, $\langle f(\mathbf{x}) \rangle$ も一定値でなけれ ばならないため.以下の条件を満たさなければならな い.

$$\int_{\mathbf{x}'\in V} W\left(|\mathbf{x}-\mathbf{x}'|,h\right) dV = 1$$
(4)

さて、粒子法では、図1に示すように、任意の評価 粒子の中心から2hの距離の影響半径を定め、その影響 半径内の粒子の値から評価粒子の値を以下のように近 似する.

$$\langle f(\mathbf{x}) \rangle = \int_{\mathbf{x}' \in V} f(\mathbf{x}') W(|\mathbf{x} - \mathbf{x}'|, h) dV$$

$$\approx \sum_{j=1}^{N} f(\mathbf{x}_j) W(\mathbf{x} - \mathbf{x}_j, h) \Delta V_j$$

$$= \sum_{j=1}^{N} \frac{m_j}{\rho_j} f(\mathbf{x}_j) W(\mathbf{x} - \mathbf{x}_j, h)$$
(5)

ここで, j は粒子番号, N は影響半径内の総粒子数である.式(5)において, 第2式から第3式にかけては,  $m_j = \rho_j \Delta V_j$ の関係を用いており,  $m_i, \rho_i, \Delta V_i$ は, それぞれ



j番目の粒子の質量, 密度, 空間に占める体積を表わしている.

ここで、式(3)の微分形は、以下の式で表される、  

$$\langle \nabla f(\mathbf{x}) \rangle = \int_{\mathbf{x}' \in V} \nabla f(\mathbf{x}') W(|\mathbf{x} - \mathbf{x}'|, h) dV$$
  
 $= \int_{\mathbf{x}' \in V} \nabla [f(\mathbf{x}') W(|\mathbf{x} - \mathbf{x}'|, h)] dV$   
 $- \int_{\mathbf{x}' \in V} f(\mathbf{x}') \nabla W(|\mathbf{x} - \mathbf{x}'|, h) dV$   
 $= -\int_{\mathbf{x}' \in V} f(\mathbf{x}') \nabla W(|\mathbf{x} - \mathbf{x}'|, h) dV$  (6)

式(6)の導出にあたっては,発散定理ならびに遠方で Wの値がゼロとなることを用いている.式(5)になら い,上式を粒子を基本単位として離散化近似すると, 以下のように書ける<sup>1)</sup>.

$$\left\langle \nabla f\left(\mathbf{x}\right)\right\rangle = -\sum_{j=1}^{N} \frac{m_{j}}{\rho_{j}} f\left(\mathbf{x}_{j}\right) \nabla W\left(\mathbf{x} - \mathbf{x}_{j}, h\right) \quad (7)$$

平滑化関数にはいくつかの関数が提案されており, SPHに用いるにあたっての検証もおこなわれているが<sup>12)</sup>, ここでは,良く用いられるスプライン関数を紹介する. 二次元解析を行う際のスプライン関数は以下の通りで ある.**図2**にスプライン関数の模式図を示す.

$$W(q,h) = \frac{10}{7\pi h^2} \begin{cases} \left(1 - \frac{3}{2}q^2 + \frac{3}{4}q^3\right) & if(0 \le q < 1) \\ \frac{1}{4}(2-q)^3 & if(1 \le q \le 2) \\ 0 & otherwise \end{cases}$$

また,三次元解析には以下のスプライン関数が用いら れる.

$$W(q,h) = \frac{1}{\pi h^3} \begin{cases} \left(1 - \frac{3}{2}q^2 + \frac{3}{4}q^3\right) & if(0 \le q < 1) \\ \frac{1}{4}(2-q)^3 & if(1 \le q \le 2) \\ 0 & otherwise \end{cases}$$

なお、 $q = \frac{|\mathbf{x}_i - \mathbf{x}_j|}{h}$ である.ここで、hは粒子間距離であるので、qの値は、常に正の値であり、図1に示す影響半径は、粒子間距離の2倍となる.

さて,固体の動的解析におけるラグランジュ座標系



NII-Electronic Library Service

(8)

での支配方程式は以下のように記述される. 質量保存則

$$\frac{D\rho}{Dt} = -\rho \,\frac{\partial U^{\beta}}{\partial x^{\beta}} \tag{10}$$

運動量保存則

$$\frac{DU^{\alpha}}{Dt} = \frac{1}{\rho} \frac{\partial \sigma^{\alpha\beta}}{\partial x^{\beta}}$$
(11)

エネルギ保存則

$$\frac{DE}{Dt} = \frac{\sigma^{\alpha\beta}}{\rho} \frac{\partial U^{\alpha}}{\partial x^{\beta}}$$
(12)

ここで、上付添字  $x^{\alpha}(x^{1}, x^{2}, x^{3})$ は座標の成分番号を示 し、総和規約を適用している.また、tは時間、 $\rho$ は密 度、 $\sigma^{\alpha\beta}$ は応力、 $U^{\alpha}$ は速度、Eは比内部エネルギを表 している.式(6)、(7)を参照し、これらを粒子iに対し て離散化された支配方程式(質量保存則、運動量保存 則、エネルギ保存則)に変換すると、以下の通りにな る.式(13)~(15)には、計算精度を向上するための補 正項が含まれているが、これらの式の導出過程につい ては、文献<sup>12</sup>に詳しいので参照されたい.

質量保存則

$$\frac{D\rho_i}{Dt} = \rho_i \sum_{j=1}^n \frac{m_j}{\rho_j} \left( U_i^\beta - U_j^\beta \right) W_{ij,\beta}$$
(13)

運動量保存則

$$\frac{DU_i^{\alpha}}{Dt} = \sum_{j=1}^n m_j \left( \frac{\sigma_i^{\alpha\beta}}{\rho_i^2} + \frac{\sigma_j^{\alpha\beta}}{\rho_j^2} \right) W_{ij,\beta}$$
(14)

エネルギ保存則

$$\frac{DE_i}{Dt} = \frac{1}{2} \sum_{j=1}^n m_j \left( U_j^{\alpha} - U_i^{\alpha} \right) \left( \frac{\sigma_i^{\alpha\beta}}{\rho_i^2} + \frac{\sigma_j^{\alpha\beta}}{\rho_j^2} \right) W_{ij,\beta}$$
(15)

なお,  $W_{i_j,\beta} = -\partial W(\mathbf{x}_i - \mathbf{x}_j, h) / \partial x^{\beta}$ とおいている. SPH において, この支配方程式をこのまま用いて数値的に 計算を行うと, 粒子と粒子の追い越し等の非物理的振 動が生じることが知られている. この非物理的振動を 押さえるためには,この支配方程式に人工粘性項  $\Pi_{i_j}$ を 導入することが有効である.

$$\Pi_{ij} = \begin{cases} \frac{-\alpha \tilde{c}_{ij} \mu_{ij} + \beta \mu_{ij}^2}{\bar{\rho}_{ij}} & if \left( U_i^{\alpha} - U_j^{\alpha} \right) \cdot \left( x_i^{\alpha} - x_j^{\alpha} \right) < 0\\ 0 & otherwise \end{cases}$$

ここでcは音速である. $\mu_{ij}, \bar{c}_{ij}, \bar{\rho}_{ij}$ は,以下の式で表される.

$$u_{ij} = \frac{h\left(U_i^{\alpha} - U_j^{\beta}\right) \cdot \left(x_i^{\alpha} - x_j^{\alpha}\right)}{\left(x_i^{\alpha} - x_j^{\alpha}\right)^2 + \varepsilon h^2}$$
(17)

(16)

— 71 —

$$\bar{c}_{ij} = \frac{c_i + c_j}{2} \tag{18}$$

$$\bar{\rho}_{ij} = \frac{\rho_i + \rho_j}{2} \tag{19}$$

これらを導入することにより,最終的なSPHの支配方 程式は以下のようになる.

質量保存則

$$\frac{D\rho_i}{Dt} = \rho_i \sum_{j=1}^n \frac{m_j}{\rho_j} \left( U_i^\beta - U_j^\beta \right) W_{ij,\beta}$$
(20)

運動量保存則

$$\frac{DU_i^{\alpha}}{Dt} = \sum_{j=1}^n m_j \left( \frac{\sigma_i^{\alpha\beta}}{\rho_i^2} + \frac{\sigma_j^{\alpha\beta}}{\rho_j^2} - \Pi_{ij} \right) W_{ij,\beta}$$
(21)

エネルギ保存則

$$\frac{DE_i}{Dt} = \frac{1}{2} \sum_{j=1}^n m_j \left( U_j^{\alpha} - U_i^{\alpha} \right) \left( \frac{\sigma_i^{\alpha\beta}}{\rho_i^2} + \frac{\sigma_j^{\alpha\beta}}{\rho_j^2} - \Pi_{ij} \right) W_{ij,\beta}$$
(22)

固体解析では,応力 σ<sup>αβ</sup>は,圧力成分 Pと偏差応力成 分 Sによって以下の式で表される.

$$\sigma^{\alpha\beta} = S^{\alpha\beta} - P\delta^{\alpha\beta} \tag{23}$$

ここで、平均応力  $\sigma_m$  と圧力 P との関係は  $\sigma_m = -P$  である. 固体の高速衝突等の解析では、式(23)の圧力成分  $P = P(\rho, E)$ の算出にあたっては、次に示す固体に対する Mie-Gruneisen の状態方程式<sup>51</sup>などが用いられる.

$$P(\rho, E) = \left(1 - \frac{1}{2}\Gamma\eta\right)P_H(\rho) + \Gamma\rho E$$
(24)

$$P_{H} = \begin{cases} a_{0}\eta + b_{0}\eta^{2} + c_{0}\eta^{3} & \eta > 0\\ a_{0\eta} & \eta < 0 \end{cases}$$
(25)

ここで,  $\eta = \frac{\rho}{\rho_0} - 1$ であり,  $\rho_0$  は初期密度である. また, Γは Gruneisen パラメータと呼ばれる. また式中の  $a_0$ ,  $b_0$ ,  $c_0$  は,線形衝撃速度  $U_s$ と,粒子速度  $U_p$ の関係式  $U_s = C + SU_p$  におけるパラメータである定数 C, S を 使って次のように表される.

$$a_{0} = \rho_{0}C^{2}$$
  

$$b_{0} = a_{0} [1 + 2 (S - 1)]$$
  

$$c_{0} = a_{0} [2 (S - 1) + 3 (S - 1)^{2}]$$
(26)

微小弾性変形を仮定した場合には, 偏差応力は以下の 式で求めることができる.

$$\dot{S}_{i}^{\alpha\beta} = \mu \bar{\dot{\varepsilon}}_{i}^{\alpha\beta} = \mu \left( \dot{\varepsilon}_{i}^{\alpha\beta} - \frac{1}{3} \delta^{\alpha\beta} \dot{\varepsilon}_{i}^{\gamma\gamma} \right)$$
(27)

ここで、 $\mu$ はせん断弾性係数(shear modulus)である.また、変形が大きくなり大ひずみが生じる解析においては、剛体回転の影響を考慮した客観応力速度を使用する必要がある.ここでは一例として、偏差応力  $S^{\alpha\beta}$ について、次の Jaumann Rate を用いる.

$$\dot{S}_{i}^{\alpha\beta} - S_{i}^{\gamma\alpha}\dot{R}_{i}^{\beta\gamma} - S_{i}^{\gamma\beta}\dot{R}_{i}^{\alpha\gamma} = \mu\left(\dot{\varepsilon}_{i}^{\alpha\beta} - \frac{1}{3}\delta^{\alpha\beta}\dot{\varepsilon}_{i}^{\gamma\gamma}\right)$$
(28)

平成17年6月

ここで、 $\dot{\epsilon}_i^{\alpha\beta}$ は変形速度(Deformation Rate)、 $\dot{R}_i^{\alpha\beta}$ はスピン(Spin)であり、以下のように表される.

$$\dot{\varepsilon}^{\alpha\beta} = \frac{1}{2} \left( \frac{\partial U^{\alpha}}{\partial x^{\beta}} + \frac{\partial U^{\beta}}{\partial x^{\alpha}} \right)$$
(29)

$$\dot{R}^{\alpha\beta} = \frac{1}{2} \left( \frac{\partial U^{\alpha}}{\partial x^{\beta}} - \frac{\partial U^{\beta}}{\partial x^{\alpha}} \right)$$
(30)

である.これらを同様に離散化式で表すと以下の式に なる.

$$\dot{\varepsilon}_{i}^{\alpha\beta} = \frac{1}{2} \sum_{j} \frac{m_{j}}{\rho_{j}} \left[ \left( U_{j}^{\alpha} - U_{i}^{\alpha} \right) W_{ij,\beta} + \left( U_{j}^{\beta} - U_{i}^{\beta} \right) W_{ij,\alpha} \right]$$
(31)

$$\dot{R}_{i}^{\alpha\beta} = \frac{1}{2} \sum_{j} \frac{m_{j}}{\rho_{j}} \left[ \left( U_{j}^{\alpha} - U_{i}^{\alpha} \right) W_{ij,\beta} - \left( U_{j}^{\beta} - U_{i}^{\beta} \right) W_{ij,\alpha} \right]$$
(32)

最後に、支配方程式は時間依存であるので、時刻 t から時刻  $t + \delta t$  における値を求めるために、それぞれの式を時間積分する必要がある。時間積分についても、様々な手法が適用可能であるが、一例として以下の一次の陽解法の式<sup>5)</sup>を示す。

 $\rho^{t+\delta t} = \rho^t + \delta t \times \dot{\rho} \tag{33}$ 

$$U^{\alpha^{t}+\delta t} = U^{\alpha^{t}} + \delta t \times \dot{U}^{\alpha} \tag{34}$$

$$S^{\alpha\beta'+\delta t} = S^{\alpha\beta'} + \delta t \times \dot{S}^{\alpha\beta}$$
(35)

$$X^{\alpha^{t+\delta t}} = X^{\alpha^{t}} + \frac{1}{2} \left( U^{\alpha^{t}} + U^{\alpha^{t+\delta t}} \right) \times \delta t$$
 (36)

### 3. SPH法による解析例

ここでは,SPHによる解析例として,圧縮性流体解 析および固体解析からそれぞれ一つ示す.

## 3.1 Smoothed Particle Hydrodynamics法によ る圧縮性流体の数値解析

まず, SPH による圧縮性流体の2次元円筒衝撃波の 解析例について示す.精度の比較のために差分法によ る結果も示す.一般に直交構造格子を用いた差分法で は,対角方向への衝撃波伝播をうまく再現できず円形 に広がる衝撃波の解法が困難となる.そこで,本例題 により SPH 法のような粒子法の利点について示す.

基礎方程式には圧縮性ラグランジュ系の方程式を用いる. 圧縮性流体に対しては, すでに示した固体の支 配方程式のうち質量保存式以外は次の式を用いて計算 する.

運動量保存の式

$$\frac{D\mathbf{U}}{Dt} = -\frac{\nabla P}{\rho} \tag{37}$$

$$\frac{DE}{Dt} = -\frac{P}{\rho} \nabla \cdot \mathbf{U}$$
(38)

状態方程式

$$P = P(\rho, E) \tag{39}$$

本例題では,状態方程式には理想気体の状態方程式を 用い,低圧部の音速と密度で無次元化する.次に,式 (37),(38)をSPH法で用いる形に離散化した式を示す. 以下の式において人工粘性項には, Monaghan タイプ の人工粘性を用いる<sup>3,12)</sup>.

運動量保存の式

$$\frac{DU^{\beta}}{Dt} = -\sum_{j=1}^{N} m_j \left( \frac{P_i}{\rho_i^2} + \frac{P_j}{\rho_j^2} + \Pi_{ij} \right) W_{ij,\beta}$$
(40)

エネルギー保存式

$$\frac{DE_{i}}{Dt} = \frac{1}{2} \sum_{j=1}^{N} m_{j} \left( \frac{P_{i}}{\rho_{i}^{2}} + \frac{P_{j}}{\rho_{j}^{2}} + \Pi_{ij} \right) \left( U_{i}^{\beta} - U_{j}^{\beta} \right) W_{ij,\beta} \quad (41)$$

上記の時間積分には1次精度の陽解法を用いた. 図3 に2次元円筒衝撃波の計算領域を示す.36×36の領域 に49×49個の粒子を配置し,高圧部には領域中心か ら半径1.875の内部に81個の粒子を配置する.この時 平滑化長さを1とする.また差分法では,SPH法にお ける初期粒子配置と格子点とを一致させ,格子点数が SPH法の粒子数と同数になるように設定した.

図4,5はt=5.68におけるSPH法による粒子の配置 と圧力分布を示しており,衝撃波の位置に粒子が多く 存在している様子が観察される.すなわち,SPH法に よる圧縮性流体の解析では,粒子が衝撃波付近に集ま ることが分かる.一方,図6は差分法による計算結果 を示す.この図から,SPH法による円筒衝撃波は円形 で一様に伝播していくのに対し,差分法による円筒衝 撃波はやや菱形で伝播する.一般的に,差分法は対角 方向への衝撃波伝播をうまく再現できないため,結果 的にこのような菱形を有する衝撃波が形成されたと考 えられる.よって,このような円筒衝撃波の解析には, 解の格子依存性の少ないSPH法の方が有効であると考





図5 圧力分布図(SPH)



図6 圧力分布図(差分法)

えられる.

図7に計算対象中心線上の圧力分布を時刻t = 5.68で 比較した図を示す.この図から,SPH法による数値解 析結果は差分法と良い一致を示しているが,ピーク圧 力は差分法のほうが低くなっている.これは,図5,6 に示した衝撃波形状の違いが原因だと考えられる.

#### 3.2 飛翔体の高速衝突の解析

SPH 法は, 高速衝突の解析に用いられることが多

— 73 —

平成17年6月



図8 高速衝突の模式図

表1 飛翔物とターゲットのサイズと各種パラメータ

	Projectile	Target
Density (kg/m <sup>3</sup> )	7.89E+03	2.71E+03
Width (m)	2.0E-03	2.0E-02
Length (m)	2.0E-03	5.0E-03
Parameter C (m/s)	3.6E+03	5.3E+03
Parameter S (-)	1.8	1.5
Gruneisen Parameter (-)	1.81	1.7
Shear Modulus (Pa)	7.92E+10	
Young Modulus (Pa)	2.06E+11	

い. ここではその計算例を示す. 図8に示すように, 非 常に固い飛翔体がある静止状態のターゲット(アルミニ ウム, Al)に 5000m/s と 500m/s で衝突し, 貫通する大 変形破壊解析を行った. このような解析は, 宇宙空間 でのスペースデブリ(ゴミ)が宇宙船等の構造物に衝突 した時の解析, あるいは衝撃を吸収するバンパーの解 析として行われることが多い. 各種パラメータ等の解 析条件は, 以下に示す.

まず,5000m/s で飛翔体がターゲットに衝突する際 のシミュレーションを行い,その計算結果を**図9~11** に示す.図9は衝突後0.8µ秒後,図10は1.7µ秒後,図 11は2.5µ秒後の飛翔体とターゲットの状態を示す.次



図9 高速飛翔体の衝突(0.8µ秒後, 5000m/s)



図10 高速飛翔体の衝突(1.7µ秒後, 5000m/s)



図11 高速飛翔体の衝突(2.5µ秒後, 5000m/s)

に500m/sで飛翔体が衝突する場合のシミュレーション 結果を図12~14に示す.図12は衝突後2.0µ秒後,図 13は6.0µ秒後,図14は8.0µ秒後の飛翔体とターゲッ トの状態を示す.これらの図では,飛翔体がターゲッ



図12 高速飛翔体の衝突(2.0µ 秒後, 500m/s)



図13 高速飛翔体の衝突(6.0µ秒後, 500m/s)



図14 高速飛翔体の衝突(8.0µ 秒後, 500m/s)

トを貫通する際の様子が良くわかる.また,5000m/sと 500m/sの速度差による貫通時の破壊形状の違いが良く わかる.応力の伝わりも比較的良い計算結果が得られ ているが,計算手法上の物理的振動が発生している.

シミュレーション 第24巻第2号

# 4. おわりに

SPH法は、これまでの解析手法が取り扱うことが困 難であった破壊を伴う解析などの解析を容易に行うこ とができるという大きな特徴を持ち、真のメッシュフ リー法という特徴も持っている.SPH法を使うことに より、流体では大規模な流れを伴う現象や、固体では、 破壊と大変形を伴う現象、あるいはこれらが連成した 現象を解析することが可能になる.また、それだけに 留まらず、気体、流体、固体等が複合した様々な問題 に適用できるようになる可能性を持っていると考えら れる.

#### 参考文献

- 1) Lucy, L. B.: A numerical approach to the testing of the fission hypothesis, Astron. J., 82, 1013 (1977)
- Gingold, R. A. and Monaghan J. J.: Smoothed particle hydrodynamics: Theory and applications to non-spherical stars, Mon. Not. R. Astr. Soc., 181, 375 (1977)
- Monaghan J. J.: Simulating free surface flows with SPH, J. Comput. Phys., 110 (1994)

- 酒井譲,楊宗億,丁泳鑵: SPH 法による非圧縮粘性流体解 析手法の研究,日本機械学会論文集,70-696, B, 1949/1956 (2004)
- 5) Libersky, L. D. et. al.: High strain lagrangian hydrodynamics, J. Comput. Phys., 109, 67/75 (1993)
- Randles, P. W. and Libersky, L. D.: Smoothed particle hydrodynamics, Comput. Methods Appl. Mech Engrg., 139, 375/408 (1996)
- 7)酒井譲,山下彰彦: SPH 理論に基づく粒子法による構造解 析の基礎的検討,日本機械学会論文集,67-659,1093/1102 (2001)
- 8) 関根英樹, 伊藤亮, 新舘恭嗣: 改良SPH法による固体?固体 超高速衝突破壊の数値解析と二重構造デブリシールドの 防御性能の評価, 日本機械学会論文集, 71-701 A, 80/88 (2002)
- 9) 宋武燮,酒井譲,山下彰彦: SPH 粒子法による構造解析(3 次元弾塑性解析手法の検討),シミュレーション,20-4, 288/295 (2001)
- 10)野口暢朗,萩原世也:衝撃を受ける頭内部解析への粒子法の適用,日本機械学会第16回計算力学講演会講演論文集, 03-26,957/958 (2003)
- 11)高野龍雄、田中伸厚、岩田賢、岸本悟志: SPH 法による血流の三次元ミクロ・シミュレーション、日本機械学会第17回計算力学講演会講演論文集、04-40、67/68 (2004)
- 12) G. R. Liu and M. B. Liu: Smoothed particle hydrodynamics a meshfree particle method–, World Scientific, ISBN 981-238-456-1 (2003)